

賀川豊彦の畏友・村島帰之（その十）

第 118 回～第 129 回

賀川豊彦の畏友・村島帰之（118）－村島「アメリカ巡礼」（3）

「雲の柱」昭和 7 年 4 月号（第 11 巻第 4 号）への寄稿の続きです。

アメリカ巡礼（3）

太平洋沿岸

村島帰之

（承前）

サクラメント

八日

朝から荷物を片付ける。桑港は来月もう一度ゆっくり訪れるとして、けふ午後、先生のお伴をして中部加州方面を巡回するためである。

フェリーステーションで、渡欧の途につかれる秦牧師及び沖野岩三部先生の一行と一緒にになる。フェリーの上で写真などを撮る。白人の衆人監視の裡で十人近くの邦人が撮るのだ。排日の警なら一騒動起るところだらう。

オークランドで賀川先生と一緒にサクラメントに向ふ。

沖野先生は車窓から海を指し乍ら、

「桑港の白人は日本の海苔を喰べない。なぜかといふと、海岸でとれると聞くからだ。といふのは、この辺の海岸へは、便所の水が流されるのだから、糞尿の中で出来たものは喰べられる筈はないのだ。海苔が喰べられぬ許りか、海水浴すら出来ないんだから可哀相だ」

といふ。

さういへば、水道の水もこの海の沖から取るのだが、そのために水道の水には消毒の薬が這入ってゐて、いやな味がある。大都市に住む者は災ひだ。

午後二時、サクラメントに着。私たちは大石繁治牧師の自動車でメイン・ホテルへ行く。大石さんは関西學院の出身。人なつかしい人だ。

カリフォルニア州廳

サクラメントは加州の首都だ。ワシントンの政廳に似た白いドームのある州廳が見える。このサクラメント・バーレーには約四千人の日本人が住んでゐるといふ事だ。

講演の始まる前の数時間を利用して州主催の競進會を見に行く。多くの発明品や果物、家畜が先生の足を止めさせる。殊に台所の労働を極端に機械化してゐるのには一驚を喫する。

アメリカ人は、働かぬでもいいやうにいいよにと機械を発明して、台所など、すっかり工場になつて了つてる。

尤も、労銀の高いアメリカでは此の趨勢は当然だともいへやう。

小鳥の卵に色素を注射して、思ひ通りの色に小鳥の羽を彩つてあるのが面白かつた。人間も注射して、黒ん坊の子を白人に作り替へる事が出来たら？と思ふ。

帰途は州廳へ立寄つて、数十年前に使用したオフィサーのピストルや兇器などを興深く見る。

この州廳で排日案も作られた訳だが、今日ではハイラム・ジョンソンのやうな排日家は存在しない。現知事も実業家出身の親日家だ。時間外なので知事もゐない。

ウエストミンスター教會

五時半からウエストミンスター教会(長老教会)の晚餐会へ行く。スパニッシュスタイルの中庭のある白い建物だ。廊下の柱が、いづれもゴチック特有の四本の小柱から成つて、その一つ一つのデザインが違つてゐる。低い手すりのある二階からは、赤い前かけをかけた西班牙嬢が顔を現はしさうな感じがある。

この教會の牧師シャーマン・ダブリュー・デバイン博士は大の親日家で、その教會を日本人に開放し、またそのオーデトリウムで日本人の結婚式を行はせたりしたこともある。此度も日本人教會で賀川氏の歓迎會をする筈だったのを、同博士が進んでその食堂を提供してくれられたのだといふ。

「日本の牧師はいつもニコニコしてゐる。私は日本人が好きだ」と博士は語つた。私は隣席の美以教會牧師町田保氏から博士に関する話を聞き乍ら食事をすませた。

七時、その教會で白人のための説教。

決心者百六十名

次いで八時から日本美以、浸礼、長老、救世軍の四教会主催の講演会をアメリカン・センターで開く。蘆森牧師が木村清松氏式の元気で司會される。聴衆は會堂に溢れ出して、私たちは已むなく教壇の下であぐらを組む有様だ。

先生の話はとても愉快的な調子で進む。果然、決心者は百六十名といふ多数であった。これにはこの地の教會が三週間前から祈禱会を開いて準備てみた事が大に関係してゐることを疑はぬ。祈りと準備のあるところに、必ず善い実を結ぶのだ。

先生も愉快だと見えて、直ぐホテルへ引揚ることを肯んじない。「どっかでソフトドリンクでも」と、喫茶店を物色するが、十一時過ぎては一寸見当らない。

折柄、大山勝次氏夫婦が教会からの帰途を行合はせて、一緒に日本人経営の喫茶店へ行く。大山さんは化粧品製造業者で、夫人は美粧術師だが、もう子供がみんな成人したので、これからは神の御用のために働きたいと言って、いろいろと計画を話される。

先生は「化粧の心理」の著者だけに、化粧品の事を根掘り葉掘り訊くので、いつか十二時を過ぎて了った。眠い。

ホテルへ帰る途中、暗い町を通って行くと、家の中から「カムオン・パゝ」といふ女の声が聞える。賣笑婦の呼込みだ。それにしてもパゝは可哀相だとわれ乍ら思ふ。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(119) — 村島「アメリカ巡礼」(4)

「雲の柱」昭和7年4月号(第11巻第4号)への寄稿の続きです。

アメリカ巡礼(4)

太平洋沿岸

村島帰之

(承前)

南加農業者大會

九月九日

午前七時からホテルの直ぐ前の教會で感謝祈祷會を持つ。早朝だのに一杯の參會者だ。賀川先生は「パウロの祈り」について奨励される。

八時から送別朝飯會。最初は幹部の方数人で行はれる予定だったのが殖えて、三十数人の人が一時に押しかけたので、ホテルの食堂はてんでこまいだ。そのため、遠慮して居られた町田牧師などは、ベーコンのないフライエッグスを喰べさせられるといふ騒ぎ。打解けた愉快的集りであった。

九時から、佛教會館に開れた南加日本人農業者大會に出席。日に焼けた同胞が三四十名集まってゐて、節くれた手を差出す。この手だ、と思ふ。若杉桑港總領事も来てゐた。

賀川先生は北米農業者發達策について述べられる。

けふは加州の獨立記念日だ。一八四九年のけふ、加州はメキシコ領から合衆國へ移って、これによって初めてアメリカが太平洋に出ることが出来た。日本との交渉もこれがために深められた訳だ。

獨立のためにはバレーオ將軍の武勇も力あったが、その後、サター氏が統一して、最後には五百萬弗の金でこの廣い土地を買取ったのである。サクラメントが州の首府になったのは一八五一年からで、その前はサンノゼにあった。

農業大會の終るのを待兼ねて、スタクトンから出迎への坂口牧師と長老の石丸さんの自動車に飛乗る。村岡牧師も「是非僕の家を表からだけなりと見てほしいから」といって同乗される。村岡牧師は日本人牧師のパイオニアだ。もうお孫さんが十何人もあるといふ。

ハイウエー

自動車はハイウエーを疾走する。アメリカへ来て一番に驚かされるのはこの道路だ。殊にハイウエーの發達には參る。ハイウエーの發達は自動車を進歩させ、人間の足を退化させた。自動車は、最早アメリカ人の靴に外ならない。少し値は張るが、月賦で買へる靴だ。

人は、はき古した靴をぬぎ替るやうに、新式へ新式へと、ミシンを買替へて行く。アメリカの至るところに古ミシンの如何に多く捨てられてゐる事か。今に古ミシンの供養塔でも建つ事だらう。

ハイウェイの発達のためには、初めは自動車の車体に課税してみたのが、今では使用するガソリンが一ガロンにつき三仙づつの課税をしてゐるといふ。それに沿道の土地にも土地増し課税を課税するといふが、無理をして土地を買った日本人などで、その納税のために見すみず土地を放擲した人もあったといふ。

ハイウェイの発達は第一に歩く人を減少させた。ハイウェイをドライブしてゐると、特にその感が深い。歩いてゐる人間に會ふのはブランケットを肩にかけて、前かがみにトボトボと歩いて行くトランプか、道路修繕の夫か位だ。それも極めて稀だ。

人間は歩く動物ではなくて、四つの輪の車に乗って歩く宿借りの一種かも知れぬ。人間の足は退化して行って、支那婦人の足のやうになるのも近いかも知れない。

ジプシーの群れ

自動車の中では、村岡さんの元気な話が、私たちの退屈を忘れさせてくれる。この附近にジプシーの天幕を張ってゐる處があるといふ事から、村岡さんの「ジプシー研究」が話題になる。

ジプシーは出埃及記と関係が有る。彼らは埃及を出てアラビアにゐる間に、馬を好む習性を得た。それから西印度に渡って種々の占卦をする事を覚え、更にヨーロッパに這入って賣淫その他善からぬ生計の術を知った。

アメリカに來たのは第一、英國が對インデアン戦争にこれを兵として送った事、第二は西班牙がジプシーをその國から駆逐するため、犯罪人等を此處に追ひやった事。第三は愛蘭が、飢饉のために、ジプシーを此處に移民させた事、此の三段階による。

彼等は馬を御することが巧みで、音楽を好みト占が得意だ。

村岡さんのジプシー談は、夏にいみじきローマンスに及ぶ。

或るジプシーの娘が王の略取するところとなった。彼女には同じジプシーの仲間に愛人があった。彼は幽囚のやるせなさを自ら慰めるために、携えて來たヴァイオリンを奏でてゐた。王はそれを聞いて痛く感興を覚えて、王の前でヴァイオリンを奏でよと命じた。女は已むなく樂器を手にしたが、たへなるメロデーの奏で出ると共に泣き伏して了った。

王は「何故泣くのか」と問ふたところ、女は「私のこのヴァイオリンの絃は父なのです。皮は母なのです。そして胴は兄なのです。悲しい音の出るのはそのためです」と答へた。王は哀れに感じて女をその愛人のふところに返してやった。

そのジプシーの群が、私たちの自動車の行手にゐた。人家のない平原の唯中に小さなテントを張ってゐた。附近にはカウボーイのやうな姿をした馬上の男も見かけたし、ワーゴンを御して行く女の姿も見た。家財を車に積んで、甲地から乙地へと渡って行くらしい一家族連れの様も見かけた。

放浪性と犯罪性とは、彼等の特性なのだ。そして賣娼とは。

村岡さんの話のつきぬ内に、早や五十哩を走り了えてスタクトンに着いた。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(120) — 村島「アメリカ巡礼」(5)

「雲の柱」昭和7年4月号(第11巻第4号)への寄稿の続きです。

アメリカ巡礼(5)

太平洋沿岸

村島帰之

(承前)

スタクトン

まづスタクトンの支那人街のあるレストランへ着く。ここで歓迎會が催されるのだ。

農業大會で思はぬ時間をとられたので、會衆は空腹を抱えて待つてゐてくれた。私と向ひ合つて食卓を共にした須藤夫人は、関西學院の岸波さん夫妻を知つてゐられて話のはづむ。

歓迎會がすむと、大阪毎日の販賣店をやって居らるゝ○○○さんの案内で、ここの名物、支那賭博場を見る。家号を月華殿といふやうな支那名の外に松島、東京、横浜などといふ日本の名称をも並べてつけてあるところは、明かに日本人が善いお客であることを物語つてゐる。

それからスタクトンの住宅区域を走つて石川栄助博士邸に行く。道幅も廣く、街路樹の美しい街だ。

石川博士邸の近くにフィリッピン人の本部があるが、先般、一フィリッピン人が白人の女を凌辱したといふ事から、ランチ事件が起こつて、この本部に爆弾を投げたものがあつたといふ。入口の

階段がヘシ飛んで今はその影さへ見えない。

七時からハイスクールのオーデトリウムで講演會。聴衆約千五百。學校の講堂でも立派なオーケストラボックスもあれば、美しいビロードの緞帳も下りてゐる。シートも勾配になってゐやうといふ堂々たるものだ。青年の音楽があつて後、先生は「日本の神の國運勁」について述べた。

八時から朝日座で日本人講演會。街路樹の影に美しくないミシンが百数十台もパッキングしてゐる。いふまでもなく、近郊から先生の講演を聞きにかけつけた同胞農夫のミシンだ。どうか賭博などに金を費さないで、信仰の道を辿ってくれるやうにと祈らずにはゐられなかつた。決心者三十名。

先生は石川博士邸に泊り、私だけは石丸さんの夫人が経営してゐるサンジョアクイン・ホテルに泊る。

ホテルはイタリー人の住宅地帯の中にあつて宿泊客中にもイタリー人が多いといふ事だ。

「不用心ですから、ドアには必ずキーをかけるやうに」との注意を受ける。

スタクトンは人口六萬。ホテルの数は五十三あるが、その内三十八（六割）は日本人の経営だといふ。客商用は日本人が一番適當なのだ。

ヨセミテ

十日

七時起床、今日は石丸正吉氏（前日のドライバーは氏の令息）のドライブで熊の棲むといふ國立公園ヨセミテ行だ。

まづ石川博士邸へ寄つて一緒に朝飯をよばれる。

九時、大山夫妻を始め大勢に送られて、ヨセミテへ百二十哩のドライブ旅行の途に上る。一行は先生、僕、坂口牧師、石丸さん、それに救世軍のスタクトン小隊長大利大尉外一人、都合七人。

この辺は砂糖大根の産地と見えて、まるで砂利を積むやうに砂糖大根を乗せて行く貨物列車を見る。

もう夏の季節を外れてゐるし、それに休日ではないので、ヨセミテ行のミシンも少い。

町を離れ二時間も行くと、私たちは見渡す限り一台のミシンの姿も見えない（もちろん、犬ころ一匹歩いてなんぞゐない）平原を走る事が出来た。両側はまぐさの原だ。處々に放牧された牛馬を

見るだけだ。

退屈だらうといふので、石丸さんが、農業の話をしてくれる。

近頃は第二世の名前で土地を買ふ人が殖えて来たが、第一世でも表面は賃銀労働者で、而も事実上は収益の分配契約が出来てゐて、日本の小作人のやうな状態でやつてゐる人が多く、大体に日本人も落ついて来たやうだ。

昔のやうに一儲けしたら日本へ帰る――といふやうな気風は漸吹減つて来た。第二世が大きくなったので、帰国するよりもこの國に居た方がいいと判つて来たからだ。地主もメキシコ人などと違つて、日本人は土地を大切にするので悦んでこれを迎へるといふ風がある。

石丸さんの農場はアマゾン川の川下の低地で四十年前、ポテト王牛島謹爾氏の拓いた十八萬エーカーもあらうといふ平原の一部で、約四百エーカーを作つてゐる。元は川の三角州だった關係からガマが腐つて出来た土のことゝて、土のかたまりに試みに火をつけるとポーッと燃え上るといふ様だ。従つて土地は肥沃で何でもよく出来るといふ。

川には鯉が沢山ゐて、始めは汁等にしたが余り多いので、今は殆ど省みずほつてあるといふ。

「勿体ないね。養鯉組合でも作つて販路を拓いたらどんなものかな」と先生が羨しさにいふ。

石丸さんは本年五十三歳、土佐の人。二十二年前に此方へ来て、今では大きな農場を持つて多数のヒリッピン人を使つてゐる。

賀川先生が、土地を焼いて灰を作る事をすゝめると、

「私はもうやつてゐます。地主は嫌ふけれど二年に一度位、二吋ほど焼きます。確かにきくですよ」

と相槌を打つ。

道はいよいよ山にかゝつた。道がうねる。溪流に沿ふたところに、上り道だのに下つて行くやうに見える。山道に自動車も十五哩しか出ない。

ヨセミテは、アメリカインディアンの住んでゐた處だが、アール・ウイルソンといふ人が狩獵に来て迷ひ込み、捕はれ、殺されるのを酋長の娘に助けられ、後、この娘と結婚して、つひに此の土地の所有者となつたのだといふ。

海拔三千尺。二萬年前、地球の氷河時代の産物で両側は何千尺といふ高い岩が屏風のやうに立つてる。立木も何百年斧を入れぬといふ鬱蒼たるものが昼なほ暗く茂つてゐる。

公園の入口では二弗の入園料をとられる。博物館へ行って、インディアンの遺物などを見て、キャンプハウスに落つく。

ハウスは六畳敷位の木造で、ベッドが二台と鏡台や机もついてゐる。ストーブもある。私は先生とその一軒を借りた。

水に外へ汲みに行く。便所も小半町行かねばならぬ。が、その不便さが却って趣味があるのだ。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(121)－村島「アメリカ巡礼」(6)

「雲の柱」昭和7年4月号(第11巻第4号)への寄稿の続きです。

アメリカ巡礼(6)

太平洋沿岸

村島帰之

(承前)

野放しの熊に會ふ

夕飯前の一刻を、自動車で散歩に出ると、森の中の道路で、はからずも一匹の熊がノコノコ森から出て来るのに會ふ。私が試みに自動車の窓からキャンデーを放ってやると、うまさうに喰べる。そしてあとをくれといはん許りに前足をチンチンさせるのだ。まるで犬だ。

私たちはその猛獣である事を忘れて、次から次へとキャンデーをやる。そして、やり終って、いくらチンチンしてもやらなくなると、さうと悟って、ノソリノソリと行ってしまった。無抵抗のところには獣も抵抗しない。

ホテルのカフェテリアで夕飯。キャンプが寒いので、スローブをたく。それも大きな木の片をたくのだ。浮世離れのした簡易生活の悦びといったやうなものを感じず。

九時から熊に夕飯をやるのを見に来いといはれて自動車で出かける。

うっさうたる森の中に行く。やがて、技師が求めて電燈のスイッチをひねる。と、川の向ふの一地点に、今し方、運ばれた食糧を中心にして十頭近くの熊が集ってゐるのが、電燈の光にうつし出される。

彼等の或者は夫婦連れであった。また或熊は他の熊と種類が違ってゐるので、遠慮勝ちに喰物に近づいて行った。技師の話では、この山には少くも百五十、多くて四百の熊がゐるといふ。そしてヨセミテといふ言葉はインディアンの「大熊」といふ意味だといふ。

私たちは珍しい経験をした事を喜び合ひ、キャンプに帰り、一同祈りをして眠る。

十一日

目をさますとまだ暗い。が、時計を見るともう八時だ。暗いと思つたのは、このハウスが森の中にあるためであった。急いで起きて食事もそこそこに立つ。

途中、前夜の熊の食堂へ来かゝると、恰度朝飯時間で、熊が六七匹来てゐる處であった。私たちはそれを寫真におさめたりして、森の中の道をフレスノに向ふ。そして前日と同じやうな道を走る事約百哩。マセダ駅に着。

駅を通過して行く貨車の上には、多くのルンペンランプ連が乗ってゐる。駅には貨車の空車が何百台となく繋ながつてゐる。いづれも皆果物輸送用のものだ。不景気のほどが知られる。

フレスノ

マセダで石丸さんの自動車を降り、そこまで出迎へられたフレスノの森民治郎氏の自動車に乗る。

二時、市廳前のフレスノホテル着。先生はキプソン博士の依頼で瀕死の重体にある牧師モントゴメリーの病床を訪れて祈つて来られた。

五時から第一メソヂスト教會で白人のため講演。聴衆八百。

六時からレストランとで歓迎會。私は中山真多良牧師の隣りに坐つて、フレスノにおける佛教徒の分裂の話などを聞く。西本願寺の一教誨師の排斥から、七千の信徒が騒ぎ出し、東本願寺へ改宗してもと意気込む者もあるといふ話だ。兎に角、此の地の仏教は旺んらしいが、第二世の宗教としてはどうだらう。アメリカにおける佛教の普遍性について考へさせられる。

面白い事に、アメリカでは一般の年中行事となつてゐるクリスマスを、全く黙殺する事が出来ないで、佛教徒もクリスマスを祀るといふ。つまりクリスマスを基督の降誕日と見ないで、アメリカの祭日とするのだ。面白いと思ふ。

八時からリンカーン公會堂で日本人のための集會。六十名の決心者を与へられた。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(122) — 村島「アメリカ巡礼」(7)

「雲の柱」昭和7年4月号(第11巻第4号)への寄稿、最終回です。

アメリカ巡礼(7)

太平洋沿岸

村島帰之

(承前)

ベーカーズフィールド

十二日

朝七時起床。八時、またもやフレズノを立って自動車で百二十哩をベーカーズフィールドに向ふ。前日の森氏のドライブで、中山牧師の附添ひだ。

地平線の美しい廣野を走る。この辺の廣野も日本人が手を入れれば、忽ち青く変わる事が出来るのだらう。この一帯は日本移民のパイオニアの夢の跡でフレズノの日本人墓地はもうコケも蒸してゐるといふ。

正午、ベーカーズフィールド着。美以教會は舊友深田種嗣氏の牧するところ。自動車が教會の前に止ると、恰度、深田氏の會堂の前を掃除してゐるところで吃驚したやうな顔で出迎へてくれた。

久子夫人にも何年振りかで會ふ。午餐は教會の執事の田中幸平氏方でよばれる。田中さんは植木屋さんだ。

午後に白人の第一メソヂスト教會での説教會、晩は龍野さんの家で御馳走になる。

聞けば龍野氏は長野県選出元自由党代議士龍野周一郎氏の令弟ださうだ。周一郎氏の令息——つまり同氏の甥——は私の中學時代の後輩であることを話すと吃驚して居られたが、さらに話して行くと、龍野氏の令嬢が垂水町長の深澤氏方にみられることが判った。深澤氏はこれまた私の知人だ。「世間って、狭いものですな」と語り合ふ。

八時から深田氏の教會でまづ第二世のための英語説教が始まり、次で九時から一般の講演があった。この辺の居留邦人の数も大したことではないのに、満負の盛況だ。尤も百人も這入れば一杯になる小じんまりした會堂ではあるが。

ベーカスフィルト（パン焼の畠）と呼ばれるだけあって、暑いったらない。私たちは上衣をぬいで先生の話聞いた。

閉会後も、酔漢のやうな訪問客があつて一向に腰をあげぬので眠ることが出来なのだが、深田牧師が追ひ出してくれた。

いざ寝るとなっても、ベッ口は一つしかない。最初はホテルへ私たち二人を泊める段取にしてみただが、賀川先生が教會の負担になるのを知って「深田君の處へ泊る」といひ出したので、急にベッドを組立てるやら深田夫妻はてんでこ舞いだ。

そしてやがて私たちは白のシーツ、新しき二つのベッドを並べて、あけ放された窓の下で眠ったが、夜半、隣の部屋を覗くと、深田夫妻親子四人は、ゆかの上にぢかに眠ってゐるのだった。すまないことだと思った先生は、

「何もいってはゐけない。牧師としては、さうした經驗を持つことが必要なのだから」と静かに制せられる。含蓄のある言葉だと思ふ。

夜半は、さすがに涼しい風が窓から這入って、善く眠ることが出来た。

十三日

眼をさますと七時、賀川先生は前夜、扇風機に向つて講演された関係から安眠出来なかつた由。私は比較的よく眠った。

深田兄夫妻と食事を共にする。この辺の産物であるメロンを御馳走になる。「日本なら壹圓はとるだらう」といふと「此の辺ではタゞ見たいですよ」との事だ。加州に来て最も有難いのは、此の美味な果物にありつける事だ。

飛行機で羅府へ

九時、加州で一番貧弱だとの定評のある深田牧師の自動車（深田氏よ、怒り給ふな）の先達で、飛行場へかけつける。ロサンゼルスへ一飛びに飛ぼうといふのだ。

陸路を行けば山また山で、小半日はかゝるところを、空を飛ばば、わづか一時間の行程だ。この飛行場は桑港からの定期航路の一駅なので、待つほどに、飛行機が着陸する。私たち二人は直ぐそれに乗った。合客は六七人。

飛行機はこれで二度目の経験だが、山越しは最初だ。

やがて、飛行機は滑走を始めた、と思ふ間もなく、ふわりと地を離れた。

（いよいよ次号はロサンゼルス）

（この号はこれで終わり）

賀川豊彦の畏友・村島帰之（123）—村島「アメリカ巡礼」（1）

「雲の柱」昭和7年5月号（第11巻第5号）への寄稿分です。

アメリカ巡礼（1）

ロサンゼルスその他

村島帰之

九月十三日

午前十一時五十分、私たちを乗せた飛行機は予定よりも十分ほど遅れて、ロサンゼルス市を距る十三哩のグランドセントラル飛行場に着く。

窓から瞰下すと、多くの同胞が馳せ集って来るのが見える。小川牧師の姿は見えないが、奮知の平田ドクトルの戎顔が群衆の中に発見された。

飛行機を降りると、暫くは賀川先生を取巻いて握手攻めだ。「よく来ましたね」と徳憲義牧師が

私の手を握る。平田ドクトルもニコニコして手を握る。多くのイエスの友の兄弟たちが、徳牧師の紹介で次から次へと名乗っては手を握る。到頭、ロサンゼルスへ来たのだ。イエスの友のゐる羅府へ着いたのだ――。いひやうのない嬉しさが胸に湧く。

新聞社その他の写真機が一しきり、私たちの前で眼玉を光らせた後、私たちにその儘自動車に乗せられた。どこへ運ばれて行くのか知らない。兎に角乗る。

ロサンゼルスの街は美しい。それに一山越しただけなのに、ベーカーズフィールドに比して遥かに涼しい。空気も澄んでみて、肺の底まで気が浸み透るやうだ。

南 加 大 學

自動車はやがて大きな三層楼を前にしたローンの脇へ横着になった。振り仰ぐと、そこには「南加大學」の名が見える。ここで聯合日曜礼拝が行はれるのだ。

自動車を降りると、最っ先に小川牧師が手を出す。桑港以来四日離れてみたゞけだが、十年も離れてゐる人に會ふやうななつかしさだ。

南加大學の講堂は一階だけで千五百の聴衆を容れるといふのださうだが、ギッシリと詰つてゐて殆ど空席がない。正面のステージには天鷲絨の緞帳が下りてゐる。その前へ賀川先生が姿を現はすと急霰の拍手だ。数百の同胞が、故國の指導者に對する敬意と親愛の叫びだ――。身の引きしまる思ひがする。

私はブラッ□ホームへは登らずに最前列の席へ腰を下ろしてみたが、賀川先生の話が始まり出す頃には、つひつひウトウトとして了った。徳牧師の眼がブラッ□ホームの上から此方を向いてゐるやうに思へたが、どうしても臉が重つて了って開かない。

先生の講演は「パウロの三つの祈り」と題するものであった。

講演が済んで後、徳牧師が私をさし招くのでプラットホームへ上る。小川牧師と私とを聴衆一同に紹介するためだ。私は「大毎記者」として紹介された。

けふの礼拝は、最初の計画では徳さんの牧して居られる合同教会で行はれる筈だったのだが、同教會ばせいぜい八百を容れる余地しかないので、已むなく大學の講堂を借入れたのだが、その借賃驚く勿れ百五十弗。これが神學部を持つ大學の、空いてゐる講堂を礼拝に貸す料金ではある。

すべての方面を商業化してやまぬアメリカだとは知つてゐたが、ここまで徹底してゐるやうとは、

お釈迦さまでも御存知あんめい。

礼拝が済んでから、講堂の前で記念撮影をする。回転式の写真機でだ。小さなアマチュアのカメラが、バッタのやうに、諸方から飛出す。

二世のために

腹が減る。今朝は飛行機に乗るので朝飯を軽く取ってゐたからだ。

徳牧師たちは一行を直ぐ自動車には乗せないで、大學の並木を縫ふて神學校の前へ連れて行った。見れば、そこには多くの白人がある。少数の日本の二世もある。小川さんに訊くと、白人と日本の二世との交歓會が始まるのだといふ。

時間がないので、校舎――嘗ては此處で小川さんが學んだ事のあるといふ――の前の石段を演壇に代えて、まづ日本の二世が演説を始める。言葉は英語だが、ながながと喋舌るところは日本式だ。善い加減にやめたらいいのになアと思つてみると、果して白人の司會者から注意された。

賀川先生は簡單直截に、

「私はここに斯く迎へらるる事を光榮に思ふ。アメリカに二種類ある。天國アメリカと地獄アメリカがそれである、太平洋の色はブルーで其名の通り平和を意味する。天國アメリカの人達がこの平和を支持しなくてはならない」と叫ばれた。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(124)―村島「アメリカ巡礼」(2)

「雲の柱」昭和7年5月号(第11巻第5号)への寄稿の続きです。

アメリカ巡礼(2)

ロサンゼルスその他

村島帰之

(前承)

古谷福松氏

午後二時、これでやっと釈放されて、午餐を頂きに徳牧師宅に向ふ。小ぢんまりしたコテージに、

本が山のやうに積れてゐる。奥さんのお手料理を頂く。われ等一行三人と、それに平田 Doktor の一家族、古谷福松氏と約十人の大午餐會だ。

古谷さんとは初對面である。氏は賀川先生の紀州南部のセツルメントのために資金を出してゐる人だ。

「あなたにお目にかかるのは始めてだが、あなたの事は先生から聞いて知り過ぎるほど知つてゐますよ」

と云つて握手をする。大きい手だ。労働に馴れた偉大なる手だ。

昼餐がすむと疲れたる先生は御休みになると思ひきや、どうして古谷君の處へ行くと云ひ出され、とうとう十七哩離れたエルモンテの古谷氏の農園に自動車飛ばした。

古谷の奥さんの労働服姿とは並んで写真をとったり、古谷氏等が創業の際に住んでゐたと云ふ、全く豚小屋同然の前で記念撮影をしたり、恰も我が屋に帰つた様な調子だった。平田 Doktor の宅にも立よられた。

共産黨員の妨害

午後八時から米人第一組合教會で連続講演會の第一夜を持つ。先生は「現代文明と宗教生活」と題して講演されたが、講演の終わるや否や、一人の矮小な男がツカツカと壇に馳せ上り「私は聴衆諸君に一言する」と云つてやり出した。

彼等は共産党で、かねてから「賀川排撃演説會」を催したり、ピラを蒔いてゐた反宗教同盟の連中であつた。これを見た小川牧師は敢然として壇上に突進してその男を壇上から引づり降した。そこへ警官が来て彼はその儘連行されて行つた。警官が二人、その男を中に挟んで、からだには身も触れずにつれて行くところは面白いと思つた。日本なら一と想像して見たからである。

一行三人、合同教會の三階に泊る。婦人會の人たちが、カーペットを新調したり、布團を縫つたりして用意をして居られたのである。教會の幹事の高橋氏夫妻がわが事のやうにして、かゆい處へ手の届くもてなし、感謝の言葉もない。

イエスの友早天礼拝

十四日

午前六時、讃美歌の声で目をさまして大急ぎで講堂へ出る。イエスの友の早天礼拝が始まるのだ。

羅府のイエスの友は六年前、賀川先生が来羅されて発會してから今日まで引続いて日曜の早天礼拝を守ってゐるのだが、此度は先生の来羅を機に一大リバイバルの起こるやうにと、去る九月十日以来一週間に亘つて連日早天祈禱會を行つて居られるのである。會衆百余名。

先生は「基督の山上垂訓」について奨励をされ、終わつて階下の食堂で会費拾五銭の朝飯を一緒に頂く。先生はデザートコースに這入ってから簡単な挨拶をされ、私も徳牧師に紹介されて立ち「私は賀川先生のノミだ」といって話す。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(125)ー村島「アメリカ巡礼」(3)

「雲の柱」昭和7年5月号(第11巻第5号)への寄稿の続きです。

アメリカ巡礼(3)

ロサンゼルスその他

村島帰之

(前承)

ウイルソン天文台へ

十時から牧師諸君と一緒にウイルソン天文台行。十二人乗のバスは牧師ばかり(但し私一人だけは例外)で占領されて了った。

天文台はマウント・ウイルソンの頂上にあるのだが、バスは五千九百尺のその頂上まで蛇のやうにうねり乍ら辿るのだ。

約二十分も来たと思ふ頃、先程まで曇つてゐた空がスッカリ晴れて快い太陽が照る。さらに頂上近くになると、雲が棚を作って、その上を歩けでもするかのやうに見え出した。山の天狗が雲に乗るといふ物語は、かうした光景を見て作り出されたものだと思ふ。

頂上のホテルで小憩をとり、この天文台を造つた人の息子ラーキン博士から天文台の説明を聞き乍ら食事を共にする。

食事後、私たち一行はまづ太陽の観測台を見る。高い塔の上のレンズを透して地下深い一点へ落ちた光線を、プリズムによって分析されたのを拡大鏡で眺めるのだが、七つの色彩の一つ一つに、別に黒い線が縞のやうにあるのが見られた。これはラジウム線ニッケル線等である事が説明された。

私と賀川先生とは、博士に連れられてエレベーターで観測台の上まで登って見た。

次は天文台。百インチのレンズは世界最大のものださうな。大きなドームの下で、巨砲のやうなレンズが据えられてある。観測する時にはドームが一部開く仕掛となつてゐる。

帰途、バスの上から見たロサンゼルス郊外は美しさの限りだった。廣い庭園のブルの住宅がつづく。東部の富豪が氣候のいゝ羅府を望んで移つて来るのだといふ。

日本人の寫真結婚が盛んに行れた頃、このブルの大庭園を背景にして寫真を撮つて「私はこんな大きな家にゐる」といって花嫁を釣つた狡猾な花婿もあつたといふ。

五時、一般の歓迎會が米人第一組合教会の階下で行れた。會衆約二百五十。

山崎牧師の司会で、南加基督連盟長の田島牧師、同婦人會長長井下夫人、日本人會長赤司氏等の歓迎の話、平田ドクトルの賀川先生の逸話などあつて、先生も一場の挨拶をされた。

講演會第二夜

八時から講演第二夜を持つ。前夜の共産党の妨害を予防するため彼等のために一定の招待席を設けた。彼等は数日前「失業者だから無料で入れてくれ」といって来たので「共産党じゃないだらうな」といって駄目を押した後、招待券を与たのであつた。

一般會衆からは一晩七十五仙、三晩連続二弗の會費を徴し、これを費用と先生の事業へ捧げることにしてゐたのである。

講演の始まらんとした時、一人の共産黨員が立つて「質問を許せ」といった。先生は「講演後、ゆっくりと個人的にお話しやう」といって、突放す。

妨害のあるのを予想してか、先生の講演は最初から殺気に満ちてゐた。特に共産主義が愛を基調とせねば成立するものでないと説くあたり、先生の眉宇には「矢でも鉄砲でも来い」といふ覺悟のほどが見えた。だが、禰次は却つて飛ばなかつた。

委員の諸君は善く会場を衛ってくれた。いざといへば、人垣となるといって決心してゐられた人々も多かった。

先生の講演は「産業革命と宗教生活」といふので、最も内容のあるものであった。

先生も快心の出来であったからか、講演が終わってから十二時近くまで合同教会の高橋幹事の部屋で氷菓をすゝり乍らいつまでも皆と談笑された。

その席上で、イエスの友の早天礼拝に六年間皆勤したといふ釜泡兵一氏に對し、先生からカフス釦を贈呈された。

平田ドクトル

十五日

午前六時から早天礼拝、先生の「基督の社会的教訓」についてのお話がある。

終わって食事。先生は農民福音學校の卒業生の農村における素晴らしい働き振りを一々例証をあげて話される。

この日、平田ドクトルは、郷里岐阜県加茂郡田原村に農村セトルメントを作り、これに要する費用を向ふ五年間負担したいと申出られる。さきには古谷氏の好意に成る紀州南部のセトルメントがあり、今またドクトルの好意で岐阜県下に光が輝かうとしてゐる。感謝だ。

十時からクリスチャン大學での講演、先生は愛の本質について語られた（英語）。

私はロサンゼルスに着いて以来、先生のお供で忙しくしてゐたため、大阪毎日の同僚工藤特派員と遂にまだ一度も会ふ機会を持たなかつたが、けふ午餐を古谷氏から招かれてゐたのを後日に廻して貰って都ホテルで工藤兄に會ふ。

工藤兄はロサンゼルス此の第一街を中心に二ブロック位は全くの日本人街で、日本にあるものは大概揃つてゐるといふ事を話した。

「酌婦すら、ちゃんとある。それに酌婦に寄生するゴロツキまで揃つてゐるのだから困る」といって、悪縁に結ばれて泣きの涙で暮してゐる酌婦の話をしてくれた。逃げやうとすればピストルが背中に向けられるといふ凄い話を。

五時から牧師会。山鹿牧師の宅で私もお相伴して御馳走になる。

八時から講演第三夜、「道徳的危機と宗教」

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(126)－村島「アメリカ巡礼」(4)

「雲の柱」昭和7年5月号(第11巻第5号)への寄稿の続きです。

アメリカ巡礼(4)

ロサンゼルスその他

村島帰之

(前承)

義勇伝道会

十六日

六時の早天祈祷会。先生の講演は「基督の十字架」について。

先生は会衆に向かって南加五万の同胞に対し、教役者わずか二十四名では手不足だから、義勇伝道者を募りたいと発議され、立ち處に四十八名の志願者を出した。大いなる恵みだ。

食後の卓上小話に、先生は武内勝、伊藤傳氏の信仰美談をされる。

十時からは南加大學の學生に對する講演と食事。

それからはラヂオの放送――忙しい事だ。ラヂオ――KHGとって、ロサンゼルスで最も大きな放送局は何故か「基督教の話は困る」といったといふので、先生は憤然として引揚げやうとされたが、案内役のハンター氏が仲裁して、先生は主として「日本とキリスト教」について語られたさうだ。私は散髪に行つてゐたので不幸にして聞き漏した。

午後は二時から東二十街の基督教会で婦人會満員のため地下室へ移るといふ騒ぎ。先生は、「現代婦人の覚悟」と題し、ジョーク入りで面白く話されたので、決心者三十八名を与へられた。

夜は賀川コープレーション主催の共励大会へ臨まれる。米人第一メソヂスト教會。三千六百名が入る會堂も、時間前に満員。五百名位は入場出来ず、やむなくこれを別室へ案内し、大衆への講演の後、特別に数分間、この人々に話して貰ふ。

羅府郊外のドライブ

私はシカゴの瀧澤兄が自動車で迎へに来てくれたので、一緒にブルバード(巴里の大通りに倣った大通りだ)をハリウッドへ長駆し、ワナブラザーやフォックスのスタジオを表から眺めて、一寸東條氏邸に立寄る。此の家は曾て堀越牧師の住つてゐた頃、牧師が日本人のためのロッヂを建

てやうとした事から排日騒動が起って、あはや放火されやうとした事のある由緒ある家だといふ。

東條氏はいふ「アメリカ人は公園や教会が近所に建つ事を喜ばないのですよ。大勢人が集るとうるさいからです」

と、基督教國のアメリカも当てにはならない。メーフラワー号で来た清教徒たちは地下で泣いてゐるに違ひない。

東條氏邸を辞して、映画俳優の住むベバリーヒルを通る。一眸の裡にロサンゼルスLos Angelesの街を瞰下す景勝の地だ。

見れば、ロサンゼルスLos Angelesの街はまるで螢籠のやうに光ってゐる。

サンタモニカSanta Monicaの海浜の方へ出る。まだ両側に家もないのに、至るところ、二十間にあらうといふ廣い舗装された路だ。

「これは地主がつけた道です。上水も下水も出来てゐます。つまり、土地を高く売るためにつけた道なんです。だから地價はとても高く、日本人なんか到底手が出ません」

と瀧澤兄が説明してくれる。

自動車は三四十分も、暗いがしかし廣い道を走ってロングビーチLong Beachやベニスといふ盛り場を車上から見物する。

大分、時間がたったので、車を町の方へ向けて貰ふ。両側の街燈が一つ置きに消えた。十一時だ。

その一つ置きの街燈も、二つの球が一つに減った。十二時だ。

照明にまで合理的な消し方をしてゐるところが面白いと思ふ。

至るところ、キチンハウスがある。自動車に乗った儘、サービスする家も大分見受けた。

建物を自動車に形どったり、帽子に形どったりしてゐる家もあった。

日本式に女給にサービスさせてゐる家もあるやうだった。

ロサンゼルスLos Angelesの街には魔天楼Magical Towerが少い。まだまだ平面に延びる余地があるからだ。ロサンゼルスLos Angelesの町の美しさは、平面的の美である。

合同教會へ帰ったのは十二時。先生たちは既に眠って居られた。

一人の姉妹

十七日

六時早天祈祷會。先生は「基督と聖靈」について善い説教をされた。

義勇傳道者の志願者が五十三名に殖えた。朝食は百名。義勇大膳職の大坪さんと土井女史、高橋女史はてんでこ舞だ。

此の日、また一の姉妹が、その郷里、静岡県三島町在に農村セツルメントを作ってほしいとて資金の提供を申出られた。熱心なイエスの友の一人だが、名は必ず隠してくれとの事なので遺憾乍ら此處には書かない。奥床しい話だ。

先生の食後小話は「如何に傳道すべきか」といふのであった。

続いて牧師會議。先生は信用組合の組織と義勇傳道師の養成について具体的の説明をされる。

そして先生は、今回のロサンゼルスにおける献金の半分を、信用組合の資金として置いて行くと声明される。

大きな靈火が加州に起こらんとしてゐるのだ！！

(この号はここまでで終わる)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(127)ー村島「アメリカ巡礼」(1)

「雲の柱」昭和7年6月号(第11巻第6号)への寄稿分です。

アメリカ巡礼(1)

ロサンゼルス其の他(二)

村島帰之

コーチュラ

正午、セントラルステーションから汽車でコーチュラに向ふ。山崎、堀越両牧師、平田ドクトル等が送られる。小川さんは仕事が山積してゐるので留守居で、賀川先生と私だけだ。

約三時間でインデオ到着。自動車で行って来て先着してゐる徳牧師等に迎えられ、自動車でコーチュラに向ふ。

暑熱百二十度の砂漠

この辺は一帯の砂漠だ。灰のやうな砂塵が立つ。風も熱を持ってゐて肌に薄気味の悪い温気を伝えるだけだ。

山を見ると、木一本見えない。勿論、日本の田舎に見るやうな小川の流れなどは何処にも探して見当らう筈はない。

大きな椰子に似た樹が繁茂して、バナナを小さくしたやうなチョコレート色の実がたわわにぶら下ってゐる。

それはデーツと呼ばれる果実で、熱いところで、而も雨の降らむところでないと成らぬ果物だといふ。「内地では百日の日昭といひますが、ここでは百日どころか、二百日の日でありがあるのです。今年の夏は珍しく二三度雨が降りましたが・・・」といふ。ひと夏に二三度の雨が珍しく多いといふのだ。

温度はと訊くと、百二十度位までに上るさうだ。でも朝夕はメッキリと下がって、逆でも涼しい。それゆえに此処に住まってみられるのだ。空気の乾燥してゐるために、暑い割合に汗も出ない。只鼻の穴が乾いて気持ちが悪い。灰のやうな砂地に行くこと約十五分で、境弘氏の家に着く。

とてもひどい蠅だ。蚊のやうな小さな蠅が群れをなして襲撃して来る。

境さんは四十エーカーの土地を所有し、数家族のメキシコ人を使用してゐる。只見れば灰のやうな畑に、恰度今、豆の種を蒔いたところだといふ。暑い處なので、今頃蒔いても育つ。そして季節外れの豆としてニューヨークの辺で非常な歓迎を受けるのだといふ。

境さんは福岡の人、十八年前に渡米し、今はこのコーチュラの村長格で、日曜の礼拝も氏が牧師代りを勤められるのだと聞いた。

小憩して歓迎会場の教会へ向ふ。

美しき基督者村

この辺は隣家といつても二三哩は離れてゐる。教会へ通ふのに二十哩も来なければならぬ家もあるといふ。

學校は勿論遠い。生徒たちは毎朝自動車の通る路まで出てゐて、そこで、學校の自動車の順々に拾はれて行くのだといふ。

教会へ来た。大きな森に二方を囲まれ、二方は廣々とした灰の砂地が展開されてゐる。

私たちはその森の下で、五六十名のこどもたちの歓迎を受けた。父母の故國を知らずこの暑熱の地に生ひ立つ小さいわが同胞よ！ 私は涙が湧き出るのを止めることが出来なかつた。

こどもは嬉々として走り廻る。その度に灰が立上るが、風もないので、その灰も高くまでは登らずに直ぐ地に戻る。

それで大地は常に掃き清めたやうな光沢と、なめらかさを保って、鼠色の天鵞絨のやうだ。只こどもの走り去った後に、一條の足跡が残されるだけだ。

太陽がその砂地に反射して目は痛い。スキー場の反射のやうに。

こどもたちは小蠅の襲撃をうるさがつて、やたらに限をこすつてゐる。

「こどもたちは、みんな蠅ために眼を悪くしてゐます」と、一人のママさんが説明してくれた。教會堂は木造の簡単なものであった。「イエスの友」と記した礎石が据えられてゐる。

コーチュラの日本人村は基督者村である。全村十八戸の中、十六戸までが信者で、その家族大人三十二人と小兒五十人が、日曜毎にこの教會へ集つて集りを持ち、日曜學校を開くのだ。

「何しろ隣近所が離れてみて毎日行き来が出来ませんので、一週一度教會へ集つてお話を聞き、又お互に世間話を交すことが、何よりの楽しみなのです」

と境さんが説明した。

尤もコーチュラがクリスチャン村になったのは古い話ではない。今から六年前、賀川先生がこゝを距る約六十哩のリバーサイドで説教をされた時、唯一の信者であつた境さん夫婦に導かれて聞きに出かけた武蔵こと、佐々木あさの両姉妹が、非常な感銘を受けて歸つて、信者の境さんと語りあつて、村全体に向つて戸別訪問的に伝道を始めたのが起りで、一九二五年の九月には一時に二十四名の兄弟姉妹が徳牧師から洗礼を受けたのだつた。

かうした全村の日本人が基督信者になつたいふことを聞いた同地方の地主ロビンソン氏は大いに感じ、殊に氏の夫人が賀川氏の同労者タッピング女史のお母さんと同級生で、予てから賀川先生の事を聞き知つてゐたので、自己所有の土地一エーカーに金千弗を添へて教會堂を建てるやうにと言つて寄付して來た。そこで村民たちは、別に自分たちで二千弗の淨財を集め、右の米人の寄附金とを併せて教會堂を建築し、なほ三エーカーの土地を購入して、将来、共同耕地などを行ふ計画を持つてゐるのである。

教會堂は同時に日本語學校でもあり、また村のコミュニティー・センターでもある。

村民はいづれも裕福で、全村みな多少づつの土地を第二世の名で所有してゐて、全然、土地を所有せね者は二三戸しかないといふ事だ。

なほ感化はこどもたちにも及んで、ここでは喧嘩が殆どないといふ。

かうした美しい話を聞いて行く内に、私はこんな處で一生住んで見たいといふやうな気が起こるのだった。

涙ぐましき歓迎會

賀川先生にこどもたちが教会堂の前の階段に腰かけさせて、廣場の方から話をした。サムエルが神の声を聞いた話だ。最初は日本語で、後には英語で。

こどもたちはこれに對し「主われを愛す」の讚美歌を日本語で歌ってくれた。

羅府から来た人たちは、きつい日射が、こどもたちの顔に当るのを避けさせるために、人垣を作ってそれを遮った。

すべてが涙ぐましい場である。

こどもへの話がすんで、一同、教会の中へ這入る。内地の田舎の小學校の校舎のやうな部屋だが、そこには一面に山海の珍味が並べられてあるではないか。曰く、壽司、ぼた餅、ざくろ梨、バナナ、鶏肉、等、等、等、いづれも姉妹たちの心尽くしにならぬものはない。

賀川先生は「正月と盆と天神祭が一緒に来たやうだ」と挨拶された。私も「親戚の家へ祭りによばれて来たやうな悦しさを感じる」と挨拶した。

歓談の裡に日が暮れた。

外へ出ると、三日月さんが照ってゐる。日本の三日月さんだ。空気が乾いてゐて、澄み切つてゐるので、三日月ではあるが、十五夜のやうに明るい。こどもたちは名月の夜のやうなつもりで、灰のやうな砂を蹴ちらし乍ら走り廻る。

さすがに夜の空気は冷たくて、シャツ一つになった肌に冷えびえと触れる。

私たちはその砂灰の中に椅子を出して、月を眺めたり、こどもの遊ぶのを眺めた。

七時から説教が始まる。賀川先生は先に白人の教會へ短い説教をするために行かれたので、先生の見えるまで、私が話をする。

百人ほど坐れる椅子の大半が一杯になつてゐた。二三十哩離れたところからも来てゐるとの事であつた。

先生の話の済んだのが十時。羅府から来た人たちは、各信者の家へ分宿させて貰ふことになった。

先生と私とは、六哩ほど離れた赤星八郎氏（熊本県下盆城郡豊野村出身）の家に泊めて貰ふ。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(128)－村島「アメリカ巡礼」(2)

「雲の柱」昭和7年6月号(第11巻第6号)への寄稿の続きです。

アメリカ巡礼(2)

ロサンゼルス其の他(二)

村島帰之

(前承)

インペリアル・バレー

十八日

眼を覚ましたのは六時、昨夜は暑熱を怖れて、全部の窓を開け放って網戸だけで寝たのだが、暁方はさすがにひんやりとした。窓から眺めると、デーツの木が巨人のやうに突っ立って、可愛い実をブラ下げてゐる。蟲除けのためか、各房に紙袋をかぶせてあるが、たいしゃ色の実がその紙袋からはみ出して、赫顔の百姓が頬冠りしてゐるやうに見える。

赤星氏の話では、デーツは初め南米で栽培して見たが駄目。そこで、此處で試作して見て成功したのでアメリカ政府でも大に奨励してゐるのだとの話。

喰べて見ると、熟柿を更に甘くしたやうな味だ。

赤星さんは白人の料理人をして居られたが非常に主人に信任されて、主人の死ぬ時、家も建てゝ貰ひ、少なからぬ遺産を貰はれ、今はその未亡人を扶け、メキシコ人を使用して、デーツの栽培をして居られるのだ。正己、和子、華子といふ三人の可愛いお子さんが居られる。

メキシコ人は粗末ながら小屋を提供して貰って労銀は一人三弗だといふ。日本人はどうも使ひにくいメキシコ人は使ひいゝので使つてゐるのだといふ。

自動車で教会へ行く。途中、スクール・コーチ(学校の自動車)を待受けてゐるハイスクールの女の子を二三人見受けた。

洗礼式

八時から先生の農村開発の講演。終って、堂後の森で高野健作氏の洗礼式を行ふ。
高野氏は全村基督者の中にあつて久しく酒盃の友となつてゐたが、夫人の熱心な奨めで、つひに仲間入りをされる事になつたのである。夫人は今、重病の床にあるといふので、先生は養生の心得を手記して贈られる。

前夜から詰めかけて、けふの集會に遅れぬやう、先生を連れて行かうと意気込んでゐるプロローレカレキシコの人々は、洗礼式の済むや否や、先生をせき立てて自動車に乗せる。私たちは、なつかしき此のクリスチャン村にいひ知れぬ愛着を持ち乍らも、時間の制限から、わづか一日にして立去らなければならない。尻から追ひ立てるプロローレの諸君を、すまない事だが、うらみに思った。

九時半、自動車は高速度で走る。ロサンゼルス兄弟たちが運転する時には、先生の健康を思つてせいぜい三十哩しか出さない速力を、今日は他の地の人なので走るは走るは。

モック遅く行つてくれと言っても、時間に遅れてはといふのだから話にならない。
道はいよいよインピリアル・バレーに這入る。

海面下二百尺の低地

この辺は海面下十九尺乃至二百尺の低地で、加ふるに左右には、立木一本ない山が屏風のやうに聳えてゐるのだから暑い事此の上なしだ。山あひから、強い風が吹下すがそれが温いのだからやり切れない。

「一体此の辺の氣象は凡て男性的ですよ。暑さもきびしいし、寒さもきつしいし、それに、この通り風までが荒いんですからね。だから、この男性的氣象によつて鍛へられた此の地方の人は皆健で元気ですよ」

と、案内役の國分牧師が説明される。

インピリアル・バレーは、最初は獨逸人が開拓し初めたのだが、途中で引揚げて行つたのを今から約二十七年前、日本人が引継いだのである。インピリアルの名のあるのは、日本帝國の意味ではなく、獨逸帝國の事なのだが、今日では日本人によつて開拓された上地として、日本帝國のインピリアルの如く思はれてゐるさうだ。

日本人は約三千人。主として沖縄県の人で果実の栽培に従事してゐるが、レタース約四萬エーカー、メロン四萬エーカー、ピー一萬エーカーといふ畑地面積を算してゐる。

以前はそれぞれ土地を所有してゐたが、果物の暴落で大損を招いて、銀行から借金をし、翌年はウンと儲けて借金の帳消しをしようとして投機的に大量栽培をやった處、またもや損。そのため折角の土地を二束三文で銀行に抵当流れに取られて了ふたといふやうな向が多く、昨日の地主に変わるに今日では、純農業労働者を以てしてゐる人が少くないといふ。

日本人が日本人を信用しないで、金を融通せないし、日本の銀行はあつても正金の如き、為替銀行で、農家に金を貸さぬのだから、日本のお百姓は白人の銀行の餌食となる許りなのだ。金融制度の確立が何より必要である。

間もなくソルトン湖が左に見え出した。コロラド川の氾濫の時、この凹地に水がたまつた儘引かないで湖となつたのだといはれる。さういはれて見ると、山の肌に、その氾濫した水の跡が明かに一線を引いて残されてゐるのが見られる。

バレー一帯、未耕地だらけで、徒にブラシの草が繁茂してゐる許りだ。

「なぜ開かないのでせうね」と訊くと、何しろ川がないのだから、耕作するためには、まづ井戸を掘らねばならない。それには少くも二千弗の金が要るが、若し掘り損へば大損になるから、うかつには掘れないといふ。アブラハム、イサクの昔語りを聞くやうな思ひがした。

プローレー

いよいよインペリアル・バレーの中心地プローレーの町に這入る。小ぢんまりとした市街を通つて日本人教会へ行く。立派な教会だ。なんでも此の市中では一番善い教会ださうで、日本人のこどもはこれが白人のこどもに對する大きな自慢なのだといふ。

勿論、教會は日本語學校を兼ねてゐて、百八十名の生徒を收容してゐるが、そのために児童送迎用の自動車三台とバスター台とを持ってゐるといふ事だ。

佛教徒の方でも同様、語學校を持ってゐて、ほぼ同数の生徒を收容してゐるが、基・佛双方共、くだらぬ競争や攻撃は控へてゐるとの事だった。

児童の送迎自動車といへば、ここでもハイスグール、グランマースクール共に送迎自動車を出してゐるが、うれしい事には、こゝの白人は日本人の開拓の功績を感謝してゐて、メキシコ人や黒人は白人と同じ學校へは入れないが、日本人は飲んでこれを迎へ、自動車も白人並に出してゐるといふ。

殊にうれしい事は、この町から十数哩離れたところに一軒の日本人が住んでゐて、そこから口イ

スクールに一人と、グランマースクールに一人のこどもを出してゐるが、市では毎朝二台の自動車を特別に仕立ててこの二人のこどもを送迎しゐるといふ事だ。

インピリアルバレーには排日はなく、親日だけがあるのだと思って、しみじみうれしくなった。

教会に這入って一杯のアイスウォーターを呑んだ時の快さ！ 喉を通って行く水がハッキリと感ぜられた。

「先月は百二十八度に上った事がありましたよ。その時、公園の木の下で空腹を抱えて寝てみた放浪者が三十人ほど日射病で死んで了ひました。畑にゐる人たちも水をひたしたタオルを頭にのせて、ただじっとしてゐるだけでした。動く暑くてやり切れぬから動かずにゐる事が唯一の避暑法なのです。蠅もさうなるとモウ飛べないで、ノロクサノロクサと這ってゐるだけです」と、教会の人が説明される。

此の辺の児は雪といふものを見た事がない。霜も殆ど降りた事はなく、若し降りればトマトの収穫に大影響を及ぼすといふのだ。

空は曇った事がなく、日が出ればその儘直射するのだから暑いのも道理だ。

水はこの市の附近はアリゾナの方から引いてゐるので世話はない。

正午からホテルで市民の歓迎会に臨む。冷却装置があるので涼しい。市長なども出席した。午後一時から教会で説教。私が前座を勤めて先生の働きについて語る。

先生の説教で五名の決心者が与えられた。

エルセントロ

ブローレーの説教の終ると同時に、またもや自動車に乗ってメキシコざかひのエルセントロへ。無理なプログラムだと思ふ。一日に場所を替へる事三度、その間自動車で運ばれること二回約八十哩。

最初プログラムには、コーチュラとモウ一箇所だけといふ事になってゐたのに中途から殖えたのだといふ。

エルセントロはメキシコに接近した、つまりアメリカの最南端の都市だ。それだけに暑いことは非常なもので、両側の家の前には、いづれもトンネルのやうな日除けの屋根が出来てゐて、通行者はその下を往来してゐる。

街路は自動車のみが通る。

アメリカの、飲みたくて飲めない連中は、ここを通過してメキシコへ這入って行くのだが、國境の向ふは、天下御免の酒場が軒を並べておいでおいでをしてゐるといふ。私は多くの酒に関する面白いエハガキを買った。

メキシコよりの密航者

酒の密輸も多いが、人間の密航も多く、年に三十名位の密航者が捕はれるといふ。多くは、(七割までは) 海路を傳つて来るので、ロシア人の漁夫なので、専門にその手引をするものもあつて、二百弗から三百弗も手数料を取るが巧に上陸させるといふ。

陸路を来る者は夜、トラックの荷物の下に潜んで、國境を突破してくるのだが、多くは日本人か支那人だといふ。中には帰國しやうとする支那人で、金銭や荷物は先に支那へ送還して貰はうとする者もあるといふ。

メキシコへは宗教家を入國させない。メキシコは元來スペインの領地でジェスイットの勢力範圍であつたが、今日では基教殊にカトリックに反感をもつて極端な圧迫だといふ。で、國分牧師などは、S S學校の教師といふので往來してゐるのださうだ。

ホテルのパーラーで小憩後、先生は古本を見に出かけた。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(129)ー村島「アメリカ巡礼」(3)

「雲の柱」昭和7年6月号(第11巻第6号)への寄稿の続きです。

アメリカ巡礼(3)

ロサンゼルス其の他(二)

村島帰之

(前承)

賀川先生病む

七時から説教。その前に先生がトイレトへ行かれると、心配してゐた腎臓から到る少量の出血

があったといふので、私たちは色を失って狼狽した。

明朝カレキシコでやられる予定だった講演は断然中止とし、そのため今夜の集會のすんだ後、カレキシコの信者の宅まで泊りに行くことも中止して、近くのホテルで休んで貰ふ事に決めた。明日のサンデアゴの午餐會もやめたいと思ったが、これは中止出来ない事情のあるのを知ってこれだけは出て貰ふ事にする。

説教は最初は第二世に對し英語で十五分ほどやって貰ふと云ふ約束だったのに、倒れるまでやるといふ決心を持った先生は、却って四十分近くに亙って長広舌を振られた。私たちは樂屋でハラハラしてゐるのだが、先生は病気の事などは忘れたかのやうに、冗談を交へ乍ら元気で話をつづけられる。

英語演説が終わって、息抜きのために私が出て少し喋舌る。そして先生の病気の事を話して、日本語演説も簡単にして貰ふからと断りをいったのだが、いざ先生が再度演壇に現はれて話し初めると、これはどうしたといふのだ。いつもよりも永く話されるではないか。

私たちは「先生も余りだ」とこぼし合った事だ。

小数しかなからうと思つてゐた決心者が二十五名も与へられた。先生が降壇されると直ぐ引渡うやうにして無理に裏から自動車でホテルへ運ぶ（全く運んだといふのが適當してゐる）そして比較的静かな一室へお入れして、面会人は一切断つた。

徳牧師と私とは隣室に部屋をとつて只祈つた。

サンデアゴ

十九日

心配で徳牧師も眠れなかつたさうだ。私も同様だった。午前二時頃、火事が近所にあつたのも手伝つて――。

五時半には二人とも起きてゐた。先生はさすがに疲れて居られたと見えて七時まで眠られる。そして元気な声で、

「もう大丈夫だ。よく眠つたから」
といはれる。

近所のランチで朝飯をたべて、八時には早くも自動車で百二十哩を山越えてサンチャゴに向ふ。

メキシコを遠眺して

けふのドライバーはイエスの友の井ノ下さんだ。ミシンも善し。ドライバーもよしと来てゐるので山路も安心だ。振りかへると、来墨の國境をなしてゐるシグナル山が三角錐のやうに見える。

山路にかゝると一面の石塊の堆積だ。誰が積んだのかと疑はれるほど上手に積重ねてあるのだ。そしてその石と石の間に、いろいろの形をしたサボテンが、とぼけ顔に突っ立てゐる。

「サボテンは政府が保護してゐて、濫伐を防いでゐるのです。で、たとへ買つても受取りを貰つておかんと後で面倒です」
と井下さんが説明される。

峠にかゝると、ひどい風だ。後の自動車を待つために、自動車を下りると、横倒しに倒されさうな風である。
来た道をと振り返ると、インペリアルバレーが、まるで海のやうに平らに瞰下される。そこで同胞が営々として働いてゐるのだ。

移民官の取調べ

峠を降りて小さな部落へ這入ると、後から来た自動車が、われ等を追い越して、ストップの合図をする。

アメリカの警官だ。メキシコからの密入者を警戒してゐる移民官だ。

同乗してゐた中村牧師が旅券を見せて賀川先生を説明する。私も旅券を見せた。

「日本への帰り道ですか」とあいそをいって、

「オーライ」だ。

かくて、正午少し前、サンディアゴ市に着。一まづメーランドホテルへ落つく。

正午から、ホテル・サンディアゴで白人たちの歓迎會。會衆約四百。一流の淑女紳士だといふ。百貨店の持主で親日家のミス・ヘレンといふ女性などが気焰をあげる。

先生の演説は素晴らしい出来だった。日本がアメリカの宣教師によって啓発された事を感謝し、今ではアメリカよりも却って日本の方が浄化されてゐると説き、何ならば、日本から宣教師をアメリカへお送りしてもよい。諧謔喝采を博した。

前夜の事があるので。夜の講演の時まで先生をホテルに監禁しようとしたが、先生は頑として従はない。結局、一時間だけといふ条件付きで、自然博物館だけを見せる事とし、三時にはホテルへ

連れ戻って無理に休養して貰ふ。

私は駅まで徳牧師と同行し、そこでカウボーイ葷人形とメキシコインディアンのトーテムを買ふ。

サンデアゴは軍港だ。日本を目標にした軍港だ。明るい街だ。空気が善いので、金持の隠居が沢山に住んでゐるといふ。

曾てパナマ記念博覧会のあつたといふ公園を通り抜ける。その公園に接近した高台の住宅はそれ等の金持の別荘らしかった。

私も前日の睡眠不足を取り返すために一時間ほど午睡する。

六時から日本人教会で晚餐會。会衆百五十人。中村牧師は此處を牧してゐるのだが在米三十年加州同胞發達史の生字引だ。

八時半から第一バプテスト教会（白人）で日本人のための説教會を持つ。

例によって私が前座を務める。先生は全く元気を恢復して一時間除り話される。

私はその間に一寸附近を歩いて見た。軍港らしく水兵さんが右往左往する。中には五六人でミシンを操ってゐるのもあつた。ダンス場からジャズがもれる。此の夜の決心者十四名。

私たちはロサンゼルスへ帰るのに、明朝の飛行機をとるか、今夜の汽車を取るかに迷つたが、先生は早く羅府へ着く方がいいといつて後者を指定される。

で、十時、ステーションへ行く。アメリカとしては最南端の、従つて終点の――ステーションだ。

寢台に這入る。徳牧師は上段、先生と私は下段。徳さんに済まないと思ひ乍ら眠る。

汽車は二時になって動き出すのである。

（この号はこれで終わり）